

モダンデザインの背景を探る：1930 年代
諸事情その6,
戦間期英国におけるコスモポリタンの活躍

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: TSUKAGUCHI, Masako メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3844

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



モダンデザインの背景を探る

—1930年代 諸事情その6 戦間期英国におけるコスモポリタンの活躍—

学芸学部 インテリアデザイン学科 塚口眞佐子

要旨：1920-30年代の社会背景からモダンデザイン史を読み解くシリーズの7稿目である。今稿は英国のモダン住宅事情を取り上げる。30年代を迎える頃に、英国では最初のモダン住宅がようやく姿を見せ始める。大陸ヨーロッパとは周回遅れと言ってよいだろう。特に伝統的住宅に強く固執する国民性の中、どのような層が設計者として住まい手として計画に加わったのか。そこにはコスモポリタニズムという共通項が、極めて明白に浮かび上がる。さらに、集合住宅が労働者階級向けと概念されていた大陸と異なり、進歩的知識人の入居を想定して計画された集合住宅が、初期の頃から誕生する特異性がみられる。入居者もまたコスモポリタニズムへの親和性を見せる層であった。前稿で取り上げたナチスを逃れ英国に亡命した左派芸術家やユダヤ人建築家が移り住んだのも、これらの集合住宅であった。今稿では、ハイポイント、ウィロウロードの家、ローンロード・フラッツ、この3件の事例を紹介し、稿を改めて事例を追加し総括を行うこととする。

キーワード：英国のモダン住宅、ハイポイント、ウィロウロードの家、ローンロード・フラッツ、ナチス・ドイツ亡命芸術家

I はじめに

モダンデザインの発展経過を観るに、歴史様式の混乱状態が口火となり様々な思潮やデザインが登場し、1920年代後半には現代に直結するメインストリームに収束し波及が始まる。このメインストリームを生んだ20年代の建築デザイン革命は、たぐいまれな様相を示すことになる。

意匠的には、過去を断ち切った断絶の激しさという点で、規模的には西欧世界で同時多発、しかも歴史上極めて短期間に革新が伝播し完成したという点において、そしてとりわけ影響力においては、現在に至るまで永続的に世界を支配し続けたのである。まさにエポックメイキングを呈した時代であった。

本論は、「モダンデザインの背景を探る」というテーマのもとに住宅に焦点を当て、1920年代から30年代の社会背景をみることで、デザイン史を読み解くシリーズの7稿目にあたる。これまで、嫌われたモダンデザインが受容されて行く経過を、主に生活者側の視座から論じてきた。

論集45号以来、各方面からのアプローチを試みた。女性の意識に視座を据え、豊富な装飾がステイタスを表示した時代の住宅観、および、その環境下で装飾を排除したモダン住宅に果敢に挑んだ施主像の変遷から、

波及のプロセスを探った。それは、初期の社会改革意識の高い限られた富裕層から、次第に一般富裕層へ波及するプロセスを浮き彫りにした。

一方の、啓蒙側・供給側のプロモーション策を観ることで、消費者側の反応を描き、モダンデザインが受容されるポイントを探ってきた。加えて、その運営を精査することで、社会環境とモダニズム運動の関わり的一端を明らかにした。

メディアのあり方にも注視した。前稿ではバウハウス流モダニズムを体現した高級家庭雑誌 *die neue linie* を取り上げ、ナチス体制下のモダニズムの様相の一端を観察した。一般に、モダニズム運動はナチスの登場で進路を断たれたと概括されるが、ナチスの思惑もからみ、モダニズムが体制に利用されることで命脈を保てた面が明らかになった。保守系高級家庭誌に表れたモダンデザインは、アヴァンギャルド性が希薄になり、ステイタスの明示アイテム化傾向をみせる。前稿では、戦間期および大戦初期のモダンデザインを、高級家庭雑誌に追いかけた。

これらアヴァンギャルド文化の中核はドイツが担った。左翼の体質の文化にヴァイマル共和国ほど寛容な政治体制は、当時は他に存在しなかったのである。中でも建築やデザインは他を圧倒し、全世界的に影響力

を持つことになる。建築デザインのメインストリームのインターナショナル・スタイルを可視化させたのもドイツであった。とはいえ、市民層の反感は根強い。自国の文化や伝統と相容れないとして広く抵抗を生んだ。

伝統を重んじる英国では、抵抗はなおさらである。本稿では英国のモダン住宅にモダンの進展を追いかける。モダンデザインへの胎動を生みながら、その中核の座を大陸に譲った英国。大陸ヨーロッパとは心情的に一体感を持ち得ないとされるその国民性は、1920年代に大陸で花開いたモダニズム運動に、どのように対峙しモダンの進展は如何なる経過をたどるのか。

英国ロンドンでの動きは 30 年代も半ばになってようやく視認されるようになる。大陸とはほぼ 10 年の遅れを見せ、周回遅れと言ってよいだろう。27 年のヴァイセンホフ・ジードルンクには、併催展を含めまったく参加せず、「英国では最新の建築スタイルにまだ至っていない」と結論付けた開催地元紙の論評があることをわれわれは既にみてきた。

モダン住宅が嫌われる中、誰が施主になり得たのか。モダン建築を担ったのは誰なのか。人的要素には共通性が鮮やかに浮かび上がることになる。コスモポリタニズムである。

『現代イギリス社会史 1950-2000』（川北稔訳）でアンドリュー・ローゼンは、「第二次大戦後になるまでは、英国生まれの建築家はモダニズムを受容することはなかったといえよう」と語る。彼らジェントルマン階級や富裕層出身の建築家が支配する建築界では、モダニズムがその理念を含め彼らの階級との関連が薄いことや、ヨーロッパ大陸が起源でイギリスの歴史から生まれたものではないとの認識がその理由の 1 つだった、と説明する。同書には建築家サー・レジナルド・プロムフィールドのモダニズム建築についての 1933 年の弁が紹介されている。「その起源においても、インスピレーションの点でも、本質的にヨーロッパ大陸のものである。祖国を誇りに思うひとりのイギリス人として、私はコスモポリタニズムを嫌い、軽蔑する」とある。

プロムフィールドの総括どおり、本稿で取り上げる彼らコスモポリタンに支えられ、英国のモダン建築は進展をみせることになる。施主として建築家として住まい手として、英国出身ではないコスモポリタンたちが展開した足跡をたどることとする。

高級集合住宅も視野に入れることになる。戸建て住宅のサーベイという文脈から外れるが、それら集合住

宅のサロンでモダン建築界の人的交流も生まれる。ここに居を得たナチスからの亡命芸術家も起爆剤になるという経過もあった。これらの集合住宅は外すわけにはいかない。もとよりその所在地は、世紀転換期頃から前衛的知識階級が集合するエリアだったのである。彼らアヴァンギャルドたちの織りなす人間模様にも迫りたい。

本論の構成は、第 1 章の「はじめに」に続き、第 2 章では英国での反感を理解するためにも、まず大陸ヨーロッパやアメリカではどのように、モダン住宅各地が揶揄・嘲笑されたのか、嫌われたのか、論集 45 号、46 号、47 号に散見されたその実例を、まとめてもう一度振り返っておきたい。

第 3 章では、集合住宅 2 例と建築家の自邸 1 例、その群像を紹介する。コスモポリタンな施主像や建築家像、および近隣とのバトルも示唆的である。彼らパーソナル・ヒストリーにも迫りたい。数々のディテールは饒舌である。その中に英国のモダン事情が浮かび上がる。

II 嫌われたモダン住宅

20 年代になって初めて可視的となる戸建てモダン住宅は、人々の目をそばだて、おかしい住宅として認識され始めたのである。公共のモダン建築とは違い希有な存在の上に、従来の住宅とは劇的に違和感があるゆえ、斬新というような生やさしいものではなかった。

論集 45 号のシュレーダー邸は、住宅をメインに据えた写真では、モンドリアンを彷彿とさせ、モダンの代表作としてさすがに清冽さを感じさせる。しかし現地では現在でも（当時とほぼ同じ）町並みとの違和感は強烈である。重厚なダーク色レンガ造の低層集合住宅の端部に、あたかもミニサイズのガソリン・スタンドかコンビニが張り付いているような風情がある。当時の衝撃は容易に理解できる。見物人が大勢訪れ、子どもは「キチガイハウス」とからかわれる。

論集 47 号のヴァイセンホフ・ジードルンクは、揶揄や批評が起こり「シュトゥットガルトの面汚し」とまで称される。白塗りの立方体の集積に北アフリカが連想され、全体像にラクダやヤシの木やターバン姿の現地人がコラージュされる。

論集 46 号のゾンネフェルト邸も理解されなかった。33 年竣工で、モダン住宅は既に専門誌以外の誌面にも登場していたが、富裕層の夫妻がなぜオフィスライクな住宅を建てるのか訝しがられた。

建築評論家でさえ正当に評価できなかったモダン建築のパイオニア作もある。論集 45 号のキングズロードの家である。パイオニア作という評価が定まるのは近年で、当時は展覧会出展の実地検分に訪れたフィリップ・ジョンソンも、外観を見て去って行く。ジョンソンは 72 年にこの不覚を公式に詫びている。

アメリカではすでにいち早く、F.L.ライトが自由な平面計画のウィンズロー邸（1894）、トーマス邸（1901）・ロビー邸（1905-09）・バーンズドール邸（1919-21 論集 45 号）を設計している。いずれもインターナショナル・スタイルではないが、水平に並ぶ連続窓や大胆なキャンティレバー、伝統を打破した斬新な平面計画など、そのモダン性は住宅の概念を新たにするものであった。われわれの目にはいずれも大豪邸としてしか映らないが、ライトの評伝 *Many Masks* の著者ブレンダン・ギルによると、竣工するなり「ハーレム」「蒸気汽船」「飛行機住宅」などありがたくないニックネームが付けられたという。弁護士たる新たな施主に「出勤途中に後ろ指されたり、笑われ者にされたくないの、あのようなデザインにはしないで欲しい」とまで言わせている。やむなく英国チューダー様式風の豪邸を設計することになる。様式打破を声高に叫んだライトですら、若き頃には古典主義も取り入れ、装飾過剰なクイーン・アン様式まで手がけている。駆け出しの新米建築家としては、施主の言うことを聞かざるをえなかったのである。

ライトのプレーリー住宅スタイルが確立した頃のハーディー邸（1905）は、地元からは「建築家の酔狂」と見なされた。ライトの代表作ジョンソン・ワックス社（1936）を委託する先進的な施主側家族ですら、30 年代になっても、同じ地元のこの住宅を変人扱いする。新奇な住宅には揶揄嘲笑が渦巻く当時だった。

時代が進んでも事情はさほど変わらない。ライトのユースニアン住宅と呼ばれる中流階級向け小住宅は、建築途中から野次馬が相次いだ。初作ジェイコブズ邸（1936）では、見学料を徴収しそれでも増加する事態に倍額に値上げ、ローン返済に充てられた。長引く大恐慌でローコスト建築への注視、という面もあるが、見学者の反応はプラグマティズムの国アメリカでさえ、首を傾げる人が多かったという。キッチンの作業スペースの延長にダイニングが位置する平面計画、床暖房敷設とはいえスラブに仕上げを施し、そのまま床とする設計に見学者は度肝を抜かれた。近隣は意表をつく外観を腹立たしく感じた。

伝統の国イギリスの状況は容易に推測がつく。モダ

ニストが集結した集合住宅ローンロード・フラッツ（1934 後に解説）は、戦後の 46 年ですら、*Horizon Magazine* 誌の「最も醜い建築コンペ」で 2 位となる。この集合住宅を含め、次章で英国のコスモポリタンたちが牽引したモダン住宅そして反感をみることとする。

III モダン住宅とその群像

III-1 高級集合住宅ハイポイント（1936, 1938）

■ 集合住宅ハイポイントその誕生（1936 年 1938 年）

1936 年竣工のモダン住宅デザインが、近隣と地方自治体の抵抗に合い、建築申請への許可を得るため、38 年の 2 期目はデザイン改変に至った例である。近隣の反応と施主側の対処法その両者に、英国の実情が浮かび上がり示唆に富む。

集合住宅の当時の社会的地位の通り、労働者用住宅計画として始まったものが、高学歴中流階級向けの高級賃貸マンションに変更された点も興味深い。イアン・カフーンの『イギリス集合住宅の 20 世紀』（鈴木雅之著訳）、建築雑誌『a+u』1984 年 4 月号掲載の杉本憲司などに、計画の概要や反対運動を訪ね、建築家



ハイポイント I

像や施主像を各大学や美術館のアーカイヴなどに探る。

ハイポイントとは集合住宅の名称で、その1期目は、コルビュジェの「新しい建築のための5つの要点」の極めて忠実な体现である。35年に設計者リュベトキンに案内され、建築雑誌『アーキテクチュラル・レビュー』36年1月号で、コルビュジェは「垂直庭園都市の萌芽」「第一級でマイルストーンたる作品」と賞賛する。近隣の反発したデザインである。

ロンドンの北西10kmのハイゲイトは緑豊かな土地柄で、隣のハムステッドと代表的住宅地を形成する。ここに立つハイポイントの施主は、オフィス機器の大会社経営の富裕なユダヤ系米国人シグムント・ゲステットナーで移民の経歴を持つ。彼にはデザイン力で販売を飛躍させた実績があった。アメリカで29年にレイモンド・ローウィ(1893-1986)に複写機をデザインさせたのである。「口紅から機関車まで」と語られ、20世紀工業デザインの巨匠となるデザイナーである。これにより売り上げを伸ばしたゲステットナーは、デザインの訴求力に慧眼が開かれていた。現代アートにも造詣深い理想の施主だった。今回の集合住宅計画は、当初は自社工場の労働者用として、前衛建築家バーソルディ・リュベトキン(1901-90)とそのユニット(リュベトキン & テクトン)に設計を発注する。

ところが施主側は営利事業として十分に成立することに気づく。健康的な環境に加え、土地柄がものを言う。ハムステッド周辺は30年代を迎える頃には、前衛芸術家や作家の居住地として、チェルシーに代わっていたのである。18世紀からすでに歴史的名士や芸術家の村であったが、この頃にはハムステッド・インテリとは進歩的左翼文化人を意味する言葉となる。彫刻家ヘンリー・ムーアや画家モンドリアンもいた。ベン・ニコルソンやバーバラ・ヘップワースも住む。グロピウス、後にはマルセル・ブロイヤーなどナチス・ドイツを逃れたモダニストも加わっていく(彼らの住まいとなったローンロード・フラッツは次次項でみる)。その事情が施主を後押しした。

計画はさっそく高学歴中流階級向けに変更される(仕様は次項で解説)。8階建てワンフロア8戸(住戸は2タイプ、115㎡と66㎡)の双十字形平面で、1ウィングに1邸の住戸は通風の優れた2面開放で、長くカーブした車路と車寄せも備えられた。モータリゼーション革命の時代を迎え、自家用車でのアプローチを想定したのである。ロビー奥にはガラス貼りのティールームも設けられた。竣工前に全戸満室となる。緑地を背に屹立するホワイトタワーは当時、「英国でもっ

とも美しいモダン建築」とモダニストの専門家からは評価される。入居者には英国を代表するモダニスト建築家で、ブダペスト出身のユダヤ系英国人エルノ・ゴールドフィンガーもいた。39年にハムステッドに自邸(次項)が建つ前、3年の賃貸契約でここに暮らしている。ハイポイントの自室用に、ダイニングセットやサイドボードなどの家具をデザインするこだわりぶりだった。

■ 建築家バーソルディ・リュベトキン(1901-90)

設計者リュベトキン自身もスーパー・コスモポリタンだった。その人物像は、大陸と英国のモダンを取り巻く環境を反映し饒舌である。革命前のロシアに生まれ、モダニズム運動渦中のベルリンとパリに学び、ロンドンを覚醒させ注目を集め、早くも38年には、ニューヨーク近代美術館開催の「英国のモダン建築展」のオープニングで、祝福を受けるまでになる。ところが、第二次大戦から間を置いた時期の、保守化する英国建築界では、本人によれば、「捨てられた存在」となる。確かに戦後の作品数は多くはない。(82年にRIBA王立英国建築家協会からゴールドメダルを授与されている。)そのリュベトキンの人物像を、本論の文脈すなわち社会との関係を中心に、英国ブリティッシュ・カウンスルとデザイン・ミュージアムにたずねる。

リュベトキンはコーカサス地方グルジアのティフリスに生まれる。リベラルで裕福なユダヤ系ロシア人家庭だった。鉄道エンジニアの父の昇進に伴い、子供時代はロシア各地を移動し、休暇にはヨーロッパの親戚を訪ねる暮らしだった(両親は後にアウシュビッツで死亡)。サンクトペテルスブルクの学校を17年に卒業し、モスクワの私立学校に進学するも、ロシア革命で閉鎖され、代わってモスクワの高等芸術工房SVOMAS(新ボルシェヴィキ・アートスクール)に進む。革命は彼らの世代にインスパイアを与えた。ここで、フランクフルト・キッチンで名を馳せるエル・リシツキーらと出会い影響を受ける。この工房での教育や開眼は、リュベトキンの人生を貫くことになる。すなわち、工業技術を用いた社会に有益な芸術、それは建築で、建築は社会を変容させるツールである、というものだった。

21歳で、政府主催の芸術展覧会の助手としてベルリンに派遣される。ここで、クレーやトーマス・マン、ゲオルグ・グロースなど、ヴァイマル共和国のアヴァンギャルド芸術家たちと親交を深める。リュベトキンの能力と魅力的な人柄は、この後も、芸術・建築界に

おける多彩な人脈を結ばせることとなる。パウハウス入学を検討するも、SVOMAS での教育と同等と判断し、芸術史家のウイルヘルム・ヴォリンガーに学ぶため、ベルリン・テキスタイルアカデミーに入学する。彼の著作を熟読していたのである。ここで学んだ社会史と美学の関係は、彼に長く影響を残した。さらにベルリンでは鉄筋コンクリート建築を観察して回る。ロシアより進んでいた分野だった。

22 歳でいよいよ建築を学ぶためポーランドに移り、ワルシャワ・ポリテクニクに入学し 2 年間で過ごす。24 歳で奨学金を得てパリのエコール・デ・ボザールに進学する。当然のこと飽き足らず、鉄筋コンクリートの第一人者オーギュスト・ペレのアトリエに通う。この年 25 年はパリ装飾博が開催されパヴィリオンの工事監理も手がける中、展示中のエスプリ・ヌーヴォー館に感銘を受ける。パリでもコルビュジエやフェルナン・レジェ、ジャン・コクトーら左派芸術家と親交を結ぶ。

政府給付金でまかなう逼迫した生活を見かね、近隣の舞台美術家が、サーカス団員御用達のナイトクラブの改装を発注する。これがアヴァンギャルド多士済々出役のスポットとして話題を呼び、リュベトキンは将来有望な若手建築家として認知されることになる。28 年には早くもパリ・ヴェルサイユ通りに 9 階建て 18 戸の洗練されたアトリエ集合住宅を、友人ジャン・ジンスベルグと共同で完成させている。コルビュジエに強く影響されたデザインである。施主はワルシャワからともにボザールへ進学した友人ジャンの父親で、ユダヤ系ポーランド人実業家だった。この近隣はコルビュジエ作品などが点在するモダン建築エリアで、典型的なパリのアパートマン以外の住居を探すファッショナブルな人種には人気のエリアだった。リュベトキンは、この時期（30 年）モスクワの旧ロシア帝国議会近くに建設する議事堂コンペの英国代表として最終候補案に残っている。

いずれロシアに戻るつもりではいたが、スターリンの抑圧的体制に帰国をあきらめ、31 年にロンドンの裕福なユダヤ系ハリ家からの依頼をきっかけに、ロンドンへ移る決心を固める。鈴木はリュベトキンを「英国の経済成長期、技術発展期に彗星のごとく登場し、たった数年で、英国の近代高層住居建築の模範を築き上げてしまう」と解説している。

英国は大陸を風靡したモダニズム運動にまだ感染しておらず、商業施設や工場、格納庫でこそ鉄筋コンクリートは普及するものの、伝統・保守が建築界を支配

していた。楽天的なリュベトキンは好機ありと期待を抱く。英国の工学や科学の遺産、19 世紀のガーデンシティ運動など人権尊重の住環境活動の実績が頼りで、加えて土地所有の貴族制の崩壊を強く期待したのである。加えて 29 年の大恐慌による 30 年代初期の不況は、英国では大陸と事情が違った。経済環境は比較的良好だったのである。

これらの期待はヨーロッパからのロンドン移住組建築家と共通した。仲間のユダヤ系ロシア人サージ・シャマイエフ、ユダヤ系ハンガリー人エルノ・ゴールドフィンガー（次項）、ユダヤ系ドイツ人エリッヒ・メンデルゾーンそして、パウハウス出身組のドイツ人ヴァルター・グロピウス、ユダヤ系ハンガリー人ラズロ・モホイ＝ナジ、同じくマルセル・ブロイヤーなどが続々とロンドンに集合し始める。彼らの活動は、マックスウェル・フライ、デニス・ラスダンら英国人若手建築家を刺激した。リュベトキンとのジョイントユニット「リュベトキン&テクトン」も誕生する。彼らすべてが英国モダン建築の起爆剤となる。

リュベトキンの英語は未熟だったが、知性と教養は畏敬の念を抱かせた。当時の英国の建築界は、伝統 VS 革新の論議が活発で、リュベトキンは論説や講演で名を挙げることになる。

テクトンの最初の仕事はロンドン動物園のゴリラハウスだった。反響を呼び、続けてペンギンプールを依頼される。ウェハースのように薄いキャンティレバーのペンギン・ウォーク、そしてダブルスパイラルといったコンクリートの造形力を鮮やかに示す作品だった。建築史の教科書に掲載される作品となる。続けて 2 つの動物園の依頼も届き、以降も公共の仕事が続く。

38 年にはフィンズベリー・ヘルスセンターが完成する。ロンドン・フィンズベリー自治体の労働党カウンシルが主なパトロンだった。慈善事業ではなく自治体の行政として適正な予算で遂行される事業に、ラディカルな社会主義の当局と親和する社会主義者リュベトキンのモダニズム理論が体现される。このヘルスセンターのポスター担当のデザイナー、アブラム・ゲイムズ（1914-96）もロンドン生まれながら、コスモポリタンの背景を持つ。ラトビア人写真家の父とポーランドとロシアの国境地帯出身の母を持つユダヤ系英国人だった。両親は 28 年に英国風に改名する。ゲイムズは数々のコンペで賞を得て、モダニズムの展望を訴えた一連のポスターを制作する。

■ 集合住宅ハイポイント

35年に設計依頼を受け、都市での暮らしという彼の理念を定義するものとなる。ガーデンとその植栽、冬期ガーデン、3面のテニスコート、スカッシュコート、スイミングプール、子供の遊び場、共有のホールやステップダウンしたティールームを備え、アメニティを完備する。コンミュン住宅とするため、設備は可能な限り共有し、残余スペースを最大化させた。

設備は特筆ものである。4戸に1台のエレベーター、90度で接する2戸に1台のキッチン用リフト、天井裏に設置の温水パネル、冷蔵庫（地下に集中コンデンサーを配置）、ビルトイン収納が備わった。窓の全幅が開口し室内をバルコニー化する折れ戸用サッシを開発し、ヒンジや洗面ボールまであらゆるパーツをデザインしスペックする。住宅には採用実績のないローラーシャッターもビルトイン家具に導入した。

しかしハイポイントⅠには欠点もあった。90度の視野に隣家が入り、全般に修理は厄介で、サービス・ターミナルの不全で電気メータを読むのに隣家へ入らねばならなかった。計画ではフォワイエは社交の場になるはずだったが目論みは外れ、ルーフテラスも十分に活用されることはなかった。しかし、英国のモダン・ムーヴメントのフラッグシップとなる。

■ 近隣との軋轢の顛末



ハイポイントⅡ

ともあれ、コスモポリタンやモダニスト入居者に恵まれ、竣工前に満室という成功に気を良くし、隣接する2期目が計画される。緑地帯で十分に引きを取り、前面道路に平行となる板状住棟だった。全戸からロンドンへの眺望が開けた。

ところが1期目とは事情が違った。1期目の姿に憤

怒した近隣はハイゲイト保存協議会を結成し、「都市及び地方計画条例」公認の審査機関としての地位を得て、反対運動を展開する。彼らの目には労働者階級の集合住宅と映ったのである。条例を盾に、彼らの美観にはそぐわない計画案に反対し続ける。妥協のために2期目は規模が1/5に縮小された。戸数を減らすことで1戸あたりのコストが2倍に上がる。そのためさらに豪華な計画に戦略変更され、フラッツではなくメゾネットになる。最上階には結婚したばかりのリュベトキン夫妻も入居する（北欧材を用い木質感のあるインテリアにカスタマイズ）。妻は製糖コンツェルンの創立者の孫娘だった。

外観にも様々な改変が加えられた。その代表が車寄せのひさしを支えるエレクションの女神像柱である。ギリシャ古典彫像の女神像がモダン建築のパーツに採用される。われわれから見て違和感のあるこの処置が、地元を慰撫したのである。その他、外装材も変化した。1期目工事の際、なめらかな連続仕上げのため新たに開発し特許を取得したコンクリート以外に、ハイポイントⅡではホワイト1色ではなく、タイル、レンガなど伝統建材なども付加された。建築デザインに関わる者の目には、ハイポイントⅡはⅠと比べ、清冽なモダン性が曖昧化しトーンダウンした印象はぬぐえない。しかし、建築家に可能な地元とのぎりぎりの妥協であったことも窺える。何枚もの代替案を提出しなかったのである。

その挙げ句が、取って付けたような付加物がまさに古代ギリシャ様式建築のエレメントであることに、われわれは絶句する。現代なら子供だましとも受け取られかねないこの装飾的処置が、まじめに歓迎されたその時代感覚に、改めてモダンデザインへの忌避感と装飾への固執の強さを窺い知るのである。

Ⅲ-2 ウィロウロードの家（1937）

■ 建築家の嫌われた自邸

前述のハイポイントに、自邸完成の39年まで3年間暮らした建築家エルノ・ゴールドフィンガー。英国を代表するモダニスト建築家の1人で、その野心的作品は常に論争を呼んだ。海外からの移住組建築家とともに、英国のモダン建築の発展に寄与する。リュベトキンと同じくスーパー・コスモポリタンで、ブダペスト出身のユダヤ系英国人だった。

ゴールドフィンガーという姓は、映画007シリーズ

を想起させる。ジェームズ・ボンドの敵の悪党名である。59年執筆の作家イアン・フレミングによる命名は、まさしく建築家ゴールドフィンガーを嫌っての命名だった。伝統的民家4軒を破壊しモダン住宅に改築した怒りからだった。伝統民家は放置され荒廃状態であったのだが。36年の初期計画時から、ウィロウロードの家は近隣の激怒を買い、その筆頭が近隣に住むフレミングだった。フレミングは古民家保存活動もおこなう。

ヒロインの常習者として描かれたゴールドフィンガーの妻らしき人物も登場する007の出版の59年には、家族は夜中のいたずら電話で疲弊し、ゴールドフィンガーは弁護士に相談している。告訴には至っていない。出版社による原著での改名と弁護士費用負担、および原著6部提供、という解決を受け入れる。この書籍は後年にはやや誇らしげに展示されることになる。

当初の、社会に有益な4階建てフラット、という詳細な計画は当局に拒絶された。以来、数回の改善案の後、37年9月にLondon County Councilが許諾するも、ゴールドフィンガーの戦いは工事中も続いた。近隣の反感は、フラットルーフなど外観でも増幅された。苦情は沸き立ち長引き、スパークする。ハムステッド保存団体からの抗議書簡がローカル紙に掲載され全国紙に展開し、論争は数週間続いた。

とはいえ、建物はコルビュジエ・スタイルではなくボックスながら、賞賛するジョージアン建築のプロポーションをキープし、彼は自邸をその現代版と概念する。これまでのインターナショナル・スタイルとは一線を画したデザインだった。彼自身がホワイトボックス信者ではなかった。スタイルとしてのモダン建築ではなく、その本質つまり合理性を追求したのである。

幾何学的な純粋性保持のため大陸のモダニストが無視した作法、たとえば雨仕舞などの伝統的ディテールも取り入れた。ウィロウロードの家は周辺のジョージアン建築に敬意を表し、環境の地域性や英国の気候・風土への回答となる住居と説明する。コンクリートがほとんど表面に出ないことも強調した。「エスキモーやズルー族のような長方形住宅を建てる、というのか」と反論を締めくくる。

それでも当時の目には、ジョージアン建築への敬意がこのような「狂気を生む」のは理解しかねたのである。結果的には近隣の拒絶状況が形状を決定した住宅でもあった、といえる。

時代は30年代後半に入っていた。進歩的文化人の代名詞ハムステッド・インテリ集結が最高潮に達していた時期だった。それでも、中心部に立つウィロウロー

ドの地元もこの顛末だった。

■ ウィロウロードの家 その概要



ウィロウロードの家 中央が2の住居表示を持つ

ウィロウロード2は自邸で、妻の資産運用として計画されたテラスハウス、ウィロウロード1-3の中央の主要部分を占める。左右は賃貸住戸と売却住戸である。30年代当時、自邸を設計できる機会を得たモダニスト建築家はほとんどいなかった。

全景は、鉄筋コンクリート造3階建て、コンクリートを覆う伝統のレンガ張り、フラットルーフ、ファサードの2Fの連続水平窓はハムステッド・ヒースに眺望が開く。1階周りの木質仕上げとレンガ素材で外観は落ち着いた風情をかもし。ミディウムブラウンにホワイトのサッシと窓周りのホワイトフレームがアクセントになり、モダンながら穏やかな印象である。正面の丸柱には古典的な溝まで掘られている。南面する裏側には全面開口のテラス窓を持ち、広く張出したバルコニーに面する。

自由な平面計画は鉄筋コンクリート造で可能となる。オープンでフレキシブルなパーティションが用途に応じて空間を構成する。天窗採光の螺旋階段が上下をつなぎ、階段周りに室配置される。コア部の浴室と階段室で全室が豊かな採光を享受した。

1Fには玄関ホールとガレージ、キッチン、使用人の区画、2Fには、スタジオ、リビング、ダイニングが配置されるも、これらは折れ戸で仕切られ、段差に変化のある1室空間になった。このパーティスペースで、ごく小規模のディナーから大規模なカクテルまで頻繁にパーティが開催される。客はほとんどが建築家で、パリ時代からの友人が多かったという。

3Fには、寝室、育児室などが配された。ベッド

はシンプルで高さが押さえられていた。室空間を広く見せるとともに、彼の信仰の表れである。つまり、日本のように高い文明社会では、床に近い部分に寝ると信じていた。

これらは革新的ではありながら、その配置は英国式空間構成のヒエラルヒーに則り、使用人室を排除、というほどにラディカルという訳ではなかった。3人の使用人（コック、家事使用人、運転手）と車2台を持つ生活だった。

インテリアでは、家具はほとんどがビルトインされ、合理的に既存の工業製品の部材を用いデザインされた。当時は職人による少量生産が容易だった。これらは将来のマス生産のプロトタイプとなる。建具や照明器具、ドアハンドルも検討を重ねる。

穏やかな自然素材感の外観とは異なり、インテリアでは所を得て多様な色彩を用いている。色彩の幅はキュービズムの画家と共通する。色彩が見切りを担い、壁や床の表面を規定した。

設備は最新ながら、暖房では効率の良いラディエントヒータに加え、伝統的な暖炉の炎を四角いマスクの中に納める。壁面がフラットとなる仕掛けである。ピュアなヴォリューム感のために、壁面をフラットにすることはモダン住宅のポリシーである。そのため、設備や収納はすべてビルトインされた。

ここに親交のあったヘンリー・ムーアの作品などが飾られる。戦時中には、展覧会「ロシアに援助を」を開催し、ピカソも展示する。シュールレアリストの影響を受け（窓枠の強調もその例）、潜在意識を掘り起こすオブジェも加わった。アフリカの木彫りや師匠ペレの帽子などもディスプレイされた。30年代のモダン住宅に対し発せられた非難、冷たく近寄り難い、という攻撃をやりこめることとなる。毛皮のラグまで登場した。

1995年にナショナルトラストが初のモダニズム住宅として管理する。批判を受けるも、「30年代の革新的ライフスタイルを鮮明によみがえらせ、当時ハムステッドに移り住んだ亡命芸術家および知識人のインパクトを示すものであると評価された」と木下壽子は説明する。公開住宅ながら、ゴールドフィンガー家の所有を維持し、ハンガリーと英国の関係を強化するためにも活用される。ハンガリー人建築学生の英国留学や英国での就業支援するため、ゴールドフィンガー家は基金を寄付し、2000年には、RIBA（王立英国建築家協会）は基金をもとにゴールドフィンガー・トラベル・スカラシップを起ち上げている。

■ 建築家エルノ・ゴールドフィンガー（1902-87）

建築家ゴールドフィンガー、ヒューマニストながら尊大でエキセントリック、歯に衣着せない言動で激怒の人でもあったという。フレミングが悪党の命名に織り込んだのはそのキャラクターも含めて、と言われる。弟子入り志願者は多いものの、出入りは激しかった。政治的には公然の左翼で、実家の資金が皮肉にも、マルキストたる彼を生涯全うさせることになる。

彼のスーパー・コスモポリタン性もリュベトキンに負けない。1902年、ハンガリーのブダペストに、林業と製材業を営む家系の裕福なユダヤ系オーストリア人弁護士の家庭に生まれる。子供時代はトランシルバニアの森（現ルーマニア）に囲まれ育つ。19年にオーストリア・ハンガリー帝国が崩壊、一家で移住を決意しウィーンに移る。ウィーン、スイスで教育を受け、23年にパリのエコール・デ・ボザールに進むも、その保守性に飽き足らず、25年に仲間とアトリエを創設する。コルビュジェに指導を仰ぐも参加を拒否され、オーギュスト・ペレに師事する。

パリ時代には、学生ながら事務所を開設し、パリの旅行代理店や、27年には初めてロンドンを訪れヘレナ・ルビンシュタイン社のメイフェアの美容サロンも手がける。（ヘレナ・ルビンシュタイン社は同じくユダヤ系の企業ながら、ガラスの巨大ショーウィンドウとスチールパイプという前衛デザインが理解されず、裁判にて設計料を得る。）アルジェリア滞在など、実家の財力のおかげで知的かつ自由放縦な暮らしを謳歌する。近代建築国際会議 CIAM の熱烈な信奉者となり、建築家や芸術家と親しむ。20年代のパリは作家と並んで、スイス人コルビュジェ、モラヴィア系オーストリア人アドルフ・ロースをはじめアヴァンギャルド芸術家を引きつける街だった。ミース、芸術家のマックス・エルンスト、フェルナン・レジェ、マン・レイらをメンター、また友人として親しむ。

31年にパリで、英国人芸術学生ウルスラ・ブラックウェルと知り合い、33年に結婚する。1706年創設の食品企業を1830年に買収した Crosse & Blackwell（現ネスル社 1960～）の娘だった。持て余すほどの彼女の資産は、他の前衛建築家と同様に仕事の乏しい戦間期の彼を助ける（ウィロウロードの家も彼女の資産運用事業として始まる）。翌34年ロンドンへ移る。大陸の政治環境や経済状況の悪化が大きな理由だった。この時期、続々とロンドンに集結する若手前衛建築家と親交を深める。それらの面々、カナダ人ウェルズ・コー

ツ（次項のローンロード・フラッツの設計者）や英国人マックスウェル・フライ（グロピウスの英国滞在時のパートナー）に加え、亡命組の多数の建築家の存在はリュベトキンの項で既にみた。いずれも本稿の重要登場人物である。

仕事が払底した戦時中も彼らの大半とは異なり、英国を離れることなく、戦後の再建に向け準備を行なう。ジャーナリズムへの露出、Army Bureau of Current Affairs に向けた一連の展覧会などである。それらの活動には、都市計画提案からキッチン計画や生活者教育まで包含した。アングロ・ソヴィエト への啓蒙活動と揶揄される面もあった。つまりは、007 シリーズの悪党ゴールドフィンガーは、アメリカの資金をソビエトに盗み出す設定であるが、マルキスト建築家が行なったことも、ソビエトのための資金獲得行動だった、と後に評されることもある。

戦後の建築の再建はスローで、望む公共建築の大半は復員公務員の手に渡る。それでも、公然の左翼という彼のスタンスが、戦後政治のメインストリームと添い、活躍が始まる。当時の代表作は共産党本部と共産党機関紙新聞社の本社屋である。50 年代から 60 年代には高層集合住宅計画で大活躍を見せる。慢性的な住宅不足の解消が喫緊の課題だった。



トレリック・タワー

本稿は 20 年代から 30 年代を扱うものであるが、ゴールドフィンガーの人物像として、これら高層集合住宅のエピソードを取り上げたい。建築家自らがここに移り住むというエピソードである。67 年、ロンドン東部スラムに建つバルフロンタワーの入居者は、最上階 27 階にゴールドフィンガー夫妻が入居したことを知る。緑豊かなハムステッドからの転居である。転居は自信を示すデモンストレーションであるとともに、住宅として高層の適否を確認するためだった。論を自ら

実行したことになり、新聞や地元は好意的に取り上げる。2 ヶ月の仮住まいであったが、入居者を次々とシャンパンに招き、意見や要望を探り出す。60 年代のロンドン東部（低所得者エリア）ではシャンパンは途方もない贅沢を意味した。しかも階級意識が仕切る社会である。この結果が 2 年後の 31 階建て高層集合住宅トレリックタワーに反映される。保育所、医院、老人クラブ、ランドリー、複数の趣味室、数軒の店舗が備わり、バルフロンと同じくグレード 2 として登録され、ロンドン西部のランドマークとなる。高層住宅への懐疑をさらに震撼させた Ronan-Point のガス爆発による崩壊事故(1968)、モダンムーブメントの凋落、という全国的試練の時期を越え、現在、空室は高値を呼び、T シャツ、絵画、歌詞にも登場するようになる。

Ⅲ－3 高級集合住宅ローンロード・フラッツ (1933-34)

■ ローンロード・フラッツその存在意義

34 年オープンの高級集合住宅ローンロード・フラッツ、英国における最初のインターナショナル・スタイルの 1 つであり、最初のモダン・フラッツとなる。（最初のインターナショナル・スタイル建築は住宅ではなくヨット・クラブで、1931 年に英国人建築家ジョセフ・エンバートンが手がけている。）ローンロード・フラッツはベヴスナーが、“a giant work of the 1930” と評す。2000 年には登録建築物として最上級のグレード 1 を授与され、2004 年に完全修復。現在も生活が営まれ、オリジナルを復元したギャラリーも設けられる。

パートナーたちが起ち上げたアイソコン社の最初の事業であった。施主はハムステッドに土地購入したブリチャード夫妻、建築家は同じくパートナーのウェルズ・コーツが務める。

建築の詳細の前に、何よりもまず当時の入居者に目を奪われる。芸術家や建築家に加えグロピウス、マルセル・ブロイヤー、ラズロ・モホイ＝ナジなどバウハウス・スターたちが加わる。英国のアヴァンギャルドが続々と結集し、“the heart of iconoclastic Hampstead”（因習破壊主義者の街ハムステッドの心臓部）と称される。住棟内のレストランバーは、ハムステッドの若きクリエイティブ人のクラブハウスとなる。巨匠となる彫刻家ヘンリー・ムーアや画家ベン・ニコルソン、女性彫刻家バーバラ・ヘップワースも常連客だった。ウィロウロードの家にも出没する面々である。

コレクティブハウジング実験としてのミニマム集合

住宅のターゲットは、若き前衛的知識人であったが、アガサ・クリスティも戦時中6年を過ごす。彼女は自身が慣れ親しむ中流上流階級を題材にする作家であり、当時は名声の頂点に立つ時期である。もっとも、アガサの場合は有名な考古学者の夫がカイロ赴任中で、夫妻の友人たる考古学教授（既に住人）がサポートした入居だった。彼女には爆撃からの避難に好ましいと感じられた。空爆で一夜にして町並みが崩壊する事態も起こっていたのである。ハムやオリーブ油を差入れる友人もあり、そのノック音や連帯感が心強かったという。戦後には英国を代表する建築家ジェイムズ・スターリングも加わる。

ナチスを逃れた人々が目立つのは理由がある。経営者のジャック・プリチャードは亡命者、特に建築家の亡命援助に携わっていたのである。ローンロード・フラッツには、一時期、ドイツや東欧からの亡命者用に部屋が確保されていた。そのコストは国別に組織された援助基金にも頼った。

英国イースト・アングリア大学図書館のプリチャード・アーカイヴには、亡命者に関する書簡（1938-40）が50アイテム残されている。入国ビザの段取り、オーストラリアへの移住希望の援助、ポーランド在英大使館との交渉など、多数のユダヤ人や政治難民の救援活動が記されている。住居の斡旋やビザの世話にとどまらない。雇用や仕事の斡旋、財政援助の手配、作品展示の世話など多岐にわたり、きめ細かく個人別対応する。ナチス・ドイツを逃れた彼らには天国だった。

プリチャードはグロピウスと英国人建築家マックスウェル・フライとのパートナーシップの縁組みを世話し、そのスポンサーも務める。この結果グロピウスは英国に数々の建築を残すことが出来、ハーバード大学招聘（1937）まで妻とともに滞英する。プリチャードは自社アイソコン社の発展にもバウハウス亡命者を援用する。結果的に、ローンロード・フラッツが起爆剤となって英国のモダン建築やモダンデザインの進展に多大な功績を残すことになる。

ミシュラン社の社員として人生を開始したプリチャードは、建築・家具会社や集合住宅事業を起こす起業家である。慈善活動家や建築家ではない彼が、ローンロードに託した思いはどんなものであったか。建築の概要からみることにする。

■ ローンロード・フラッツの概要



ローンロード・フラッツ（ISOKON と表示されている）

外観をアガサ・クリスティは白く輝く大型客船に例えた。鉄筋コンクリート造4Fで全34戸、セメントウオッシュ仕上げ、緩やかな流線を描く躯体、客船デッキと見まがうキャンティレバーの外廊下と外階段、フラットルーフ、本体の水平感とコントラストを生むもう1つの階段室、そのスレンダーな縦長窓が垂直感を強調、そしてEVタワー、という造形的構成である。雑誌の「最も醜い建築コンペ」で2位になった建て物であることは既にみた。

共同体住居の実験作としてフラットは狭く、基本的にはホテルライクな1室構成のワンルームマンションだった。モダニストとは所有物に固執しない者、というのが設計者の理念で、彼らに向けた設計である。30㎡強ほどのシングル22室と、端部のスイートタイプが4室、このほかペントハウス2戸（1戸はプリチャード夫妻用）、スタジオ3室とスタッフ区画があった。居室にはキッチンと浴室、洗面脱衣室が備わる。駐車場はEVタワーに隣接する。ミニマム空間とはいえ、給湯、電気、電話、暖房などの設備や仕上げは贅沢だった。ガラスブロックやマホガニーパネルが用いられた。サインデザインや色彩計画も論議が重ねられる。

入居者は共有スペースで交流する。電気冷蔵庫の備わったメインキッチンが共有で、ダムウエイターで各戸に配膳された（キッチンは37年にマルセル・ブロイヤーによりレストランバーに改装、前衛知識人のサロンとなり、69年には再び居室となる）。ランドリーや靴磨き、ベッドメイクや調理も提供される。独身者への単なる家事サービスではなく、建築に見合った新しい生活のためには、物理的・精神的重荷の排除が設計者の理念として主張された。その1つが家事サービス

であった。建築評論家の J. M.リチャードは、ローンロード・フラッツを「ル・コルビュジェを超えた作品、彼の設計した何よりも、住むためのマシンに近い」と記す。

33 年にはフルサイズモデルがトレードフェアで発表され、広報活動が活発化する。アーカイヴには各媒体用の各種広告材も残されている。建築学生の団体見学も相次ぐ。都市の若手知識階級の住居として、コルビュジェを超える前衛的集合住宅に理想を見だし、経営へ至らせた経緯はどのようなものであったか。

■ 施主ジャック・プリチャード (1899-1992)

曾祖父アンドルー・プリチャード (1804-82) は自然史に通じ博物を商い、顕微鏡の発展に多大な貢献をする。当時は博物学の時代だった。有名な化学者・物理学者ファラデーとも親交を結ぶ。祖父は市の経営者協会の指導的人物で、父はハムステッド市長も務めた。これ以外には芸術家も続出する。これらの系譜がジャック・プリチャードに結ぶ。つまり新奇デザインへの志向とその起業、および政治への関心である。芸術のバトロン、ヨット、など多方面に才能を開花させる。

プリチャードはハムステッドに生まれ、第一次大戦に従軍、ケンブリッジ大学ペンブローク・カレッジに学び、工学と経済学を修め、理論的知識の実用化に興味を示す。ケンブリッジからロンドンまでの移動に、自転車、自動車、カヌー、航空機まで動員し、時間と運動の関係を比較研究する。

22 年に卒業、ミシュラン社に入社し、フランスのクレルモン・フェランに赴任する。主に広告部門で働き、人間工学とマーケットリサーチの経験を積むことになる。本人も科学的な経営手法を発見したとされる。25 年にはヴェネスタ合板会社に支配人として参画する。無垢材代替物という合板の通り相場を超え、特性を生かす創造性豊かな製品化を模索する。28 年には友人と共同でキャビネットをデザインする。このヴェネスタ社の在籍が彼にはモダンデザインへの直接の一步となる。この頃出会ったのが、建築家・構造家ウェルズ・コートツで、後のローンロード・フラッツ設計者である。彼は店舗設計に、破れの無い大胆なカーブを合板で造形していた。

29 年 30 年とプリチャードはパリに赴任する。30 年開催のオリンピア建材博でのヴェネスタ社ブースデザインをコルビュジェに依頼し、前衛芸術家のメッカ、ガルシェのヴィラ (論集 46 号) にも案内される。30 年訪英のシャルロット・ペリアン (コルビュジェの家

具パートナー) をヨットでもてなしお互いの知己を広げる。プリチャードの目を開かせる大陸訪問や建築家との交流は、この頃が出発点となる。知遇を得て作品に案内されることで、彼をもっともインターナショナル・スタイルに通じた英国人に仕立てる。

30 年 31 年と、ヴァイセンホフ・ジードルンク (論集 47 号) やバウハウスを訪れる。ベルリンではユダヤ系有名建築家エリッヒ・メンデルゾーン (後に英国に移住) をコートツとともに訪ね、35 年のフィンランドではアルヴァ・アアルトに代表作パイミオ・サナトリウムと家具工場に案内される。(第二次大戦中フィンランド窮乏の折、アアルトに英国避難を提案する。)(この他、40 年に家族を北米に疎開させた際のトラブルに関して、F・L・ライトから対処の電報を受け取る。ゴールドフィンガーやユダヤ系建築家シャマイエフとも書簡を交わす。)

これら建築家からの啓発は、自社の再構築につながる。プリチャード夫妻はすでに、ウェルズ・コートツとパートナーシップで、29 年にモダン住宅の設計施工会社ウェルズ・コートツ & パートナーズを起ち上げ、彼ら自身の住宅計画に着手していた。これを 31 年にアイソコン社と改称する。家具や設備も含め、モダンリビングを訴求する意図が込められた。パートナーたちの自邸の住宅計画を発展解消させたものがローンロード・フラッツである。(ISOKON とは Isometric Unit Construction からの造語で、多元的意味を込めた。後にモダンスタイルと同義語となる会社に育つ。最初の事業がローンロード・フラッツだった。)

同じ年にシンクタンク PEP (Political and Economic Planning) の創立メンバーを務めるなど、プリチャードは社会活動にも参画する。政治に関する 224 アイテム (1920-72) がアーカイヴに保存される。36-39 年の書簡には、戦争回避の対独宥和政策への関心を示し、国際連盟の強化を訴え、地元選出国議員ジョージ・バルフォードや、後の首相ハロルド・マクミランとも書簡を交わしている (ともに保守党)。

PEP は政党横断組織だった。ここにも彼の特質が表れる。異分野の人間を結びつけスパークさせる特異な才である。たとえばグロピウスを教育委員長に紹介する。この結果、渡米前のグロピウスは英国での唯一の公共建築 Impington Villa College を残せた。プリチャードはローンロード・フラッツを出発点に、英国のモダン建築に多大に寄与したのである。

■ その特異なライフスタイル

ケンブリッジ大学ガートン・カレッジに薬学を学ぶ女性と出会い 24 年に結婚する。彼女は細菌学者であり、結婚後、医師として精神科医院を開業する。アメリカへ疎開後も精神科医を務める。彼ら夫妻は因習破壊主義者のハムステッド人として、特異なライフスタイルを過ごす。

ヌードでの日光浴の支持など、私生活もラディカルだったが、子供の教育も先鋭的だった。因習や非合理の排除教育を実践する創立間もないビーコン・ヒル校へ入学させる。27 年の創設は哲学者バートランド・ラッセルとその妻ドラによる。世間ではドラの創設と受け取られていた。ドラは強力なフェミニストで社会主義者、産児制限の推進者だった。労働党内でキャンペーンを展開する。結婚前からラッセルとともに徴兵制反対運動を手がけ、革命直後のロシアにレーニンを訪ねる。サーの称号を持つ父のもと、アッパーミドルに生まれた彼女自身も前衛教育を受けて育つ。結婚は女性を隷属させるとし、人間は男性も女性も本来、一夫多妻、一婦多夫が自然であると説く。この箇所以外は、大富豪に生まれたバーンズドール邸（論集 45 号）の女性施主と驚くほど共通点がある。

ドラ・ラッセルの教育理論に共鳴したプリチャード夫妻自身が、それぞれに公認の愛人を持つ暮らしだった。妻モーリーはパートナーの建築家ウェルズ・コーツを、夫ジャック・プリチャードは教育者を愛人に持ち、愛人との間に誕生した女兒は後に建築家として活躍する。ローンロード・フラッツ事業そのものはパートナー達のコラボではあるが、コンセプトは彼女モーリーによる、と専門誌に掲載されることもあった。このワンルーム・マンション形式がどちらの理念かを巡っては、モーリーとコーツの間で、書簡で何度も意見を衝突させている。結論的にはコーツが主導したものではあるが、推進エンジンにオイルを注ぎ煽動役を果たしたのは、モーリーであった。といえるだろう。

■ アイソコン社

集合住宅事業から出発したアイソコン社は、時機を得て家具に軸足を移動させる。戦時中の中断を超え、現在も ISOKON PLUS として存続する。代表作の 1 つはブロイヤーによるロングチェアー(1936)で、V&A ミュージアム永久コレクションとなる。始まりは 34 年のグロピウス来英による。彼はローンロードに住居を提供され、アイソコン社のデザインを監理し、ブロイヤー招聘を提言する。代表作ロングチェアーは 32

年のアルミでの制作の合板版だった。社の方向付けに、グロピウスの存在が大きく奏功したのである。

もう 1 人のバウハウス出身者ラズロ・モホイ＝ナジは 35 年 5 月に来英する。アイソコン社のロゴやカタログ、リーフレットなどグラフィックを担当する。社はロンドンのバウハウスという状況を示す。39 年には合板の供給が止まり、ショールームが閉鎖され、社は事業を中断することになる。

■ 建築家ウェルズ・コーツ (1895-1958)

ローンロード・フラッツがデビュー作であり代表作となるカナダ人建築家である。人生の大半を、故国を離れて過ごす。作品すべてに共通するのは、最小の材料で最大の快適性を生む最もシンプルな住居、というポリシーである。

そこには東京で生まれ 18 歳まで過ごした日本の体験が、審美感の形成に重要な役割を果たしている。本人も早くも 31 年 4 月号の *Architects' Journal* に「日本で受けたインスピレーション」と題した原稿を掲載する。シンプルな居住スペースやビルトインされた収納家具など、さまざまに具現化させる。自身のアトリエには畳敷きの談話コーナーも持つ。

竣工前の 33 年 5 月の *The Listener* 誌の 3 ページに渡るインタビュー記事で、設計前に概念していた生活へのアプローチを語る。「新しいフリーダム、新しい体験、それはわれわれがライフと呼ぶものであるが、そのためには、生活に物質的持続的な重荷を背負わせてはいけない」とある。

ウェルズ・コーツはヴィクトリア大学卒業後メソジスト派の伝道師を努めた父と、F. L. ライトの師匠ルイス・サリヴァンに建築を学んだユダヤ系カナダ人の母の元に生まれる。1890 年に来日した父は伝道のかたわら、同志社英学校や東洋英和学校で教育に携わり、「法然上人行状絵図」の共訳者を努めるなど、日本の芸術に親しむ。母も日本で最も初期のミッションスクールの 1 つを設計する。これらの環境が、ウェルズを建築に導き、第二次大戦前の英国建築界に多大な影響を与える建築家となる。

とは言うものの実施作品は比較的少ない。建築雑誌やデザイン関連出版物に取り上げられること膨大ながら、著作は 16 編と多くはない。ブリティッシュ・コロンビア大学を卒業後、22 年にイーストロンドン・カレッジに在籍、工学を修め、独立を果たす。英国放送 BBC のスタジオの設計や、マイクスタンドやベークライトのラジオのデザインなどもこなす。

70年代になり彼の評判はよみがえる。時は英国ではモダニズムの公共建築が忌み嫌われた時代であったが、コートツの哲学、それは形態としてのモダニズム建築ではなく、住まい方としてのモダニズム建築、という思想が共鳴されたのである。彼のもう1つの代表作、高級集合住宅エンバシー・コートもモダニズム建築ながら、優美な姿とともにロケーションを活かした設計が好感された。

35年竣工のエンバシー・コート、英国南海岸ブライトンのビーチを前にした11階建て72戸の豪華マンションである。スタッフ40名の居住区画も併せ持つ。自動車でアクセスすると制服着用のドアマンが出迎え、運転手が地下駐車場に車を回す間に、ポーターやメイドが荷物を運び、住戸の準備を進めた。現代の高級ホテル以上のサービスが伴うエンバシー・コートには、富裕層や有名人が入居することになる。ルーフトラスにはバーが備わり、食事もすべてレストランで提供され、入居者はファッションブルに着飾ったセレブたちと肩をすりあわせることになる。(開戦とともにサービスは終了)

とはいえ、各住戸は「ミニマム・フラット」であることに変わりはない。なめらかな仕上げの壁面には収納が仕込まれ、窓周りのサッシは全幅開口、電話が全住戸完備、セントラルヒーティングと床暖房、浴室・キッチン・洗面所の3カ所給湯が可能な24時間対応の温水供給システムが備わった、ビルトインの電熱機器も建築家が用途に応じてデザインした。加熱機器と冷蔵庫が組み込まれたキッチンは、30年代では「聞いたこともない」新機軸だった。電気による暖炉、水栓金具、シャワーヘッド、カーベット、ラグ、ミラー、家具、はすべて特注でデザインされ、多くは建築家自身による。

ローンロード・フラッツでもみたように、これらの装備はすべて、コートツの”Design for Living”を実践するもので、ここで繰り上げられる生活は、美しい建築に見合う、開放的でインスパイアを与えるものであるべきだった。

集合住宅エンバシー・コートはモダンデザインながら、同時期の集合住宅ハイポイントやウィロウロードの家と違い、ブライトンの一般市民に憧れを持って受け入れられ、建築ジャーナリズムにも喝采で迎えられた。批判もあったが辛辣ではなく、バルコニーがやや狭いとか通路がやや暗いとか、その類いだった。コートツの設計思想の気迫が時代を制した、とも語られているが、開けた海辺に立ち、純然たる集合住宅というよ

りは、ホテルライクな風情と入居者のステイタスが、デザインへの許容と共感と憧憬を招いたとも思われる。戦前の最も影響力のある建築評論家の1人、チャールズ・レイリーは述べる。「ここブライトンで、高層ながら、長く明晰なラインを描く優美なビル、水平感があると同時に垂直感もかもす。華奢でロマンティックな階段室は、階へ到達するたびに、空中に張り出したキャンティレバーに踏み込むことになる。昼も夜も心髄までスリルを味わせてくれる。」とある。

III-4 3件の事例をふりかえって

集合住宅ハイポイント(1&II)(1936, 1938)と3戸建て住宅のウィロウロードの家(1937)、および、单身者向け集合住宅ローンロード・フラッツ(1933-34)、と3件の事例を施主像、建築家像と併せてみてきた。これに加えて、ユダヤ系建築家シャマイエフとドイツからの亡命ユダヤ系建築家メンデルゾーンこの2名による合作もある。チェルシーに至る高級街区スローンスクエア近辺に立つコーエン邸(施主はユダヤ系ジャーナリスト)と、隣接するレヴィ邸で(施主はユダヤ系作家と女優の妻)、これはすでにみたユニットのグロピウスとマクスウェル・フライによる、などの事例は誌幅の都合で今号からは割愛する。(これらのユニットによる設計とは、亡命者が英国国内で設計活動を行うための手だてであった。)

これらに共通するのが建築家のコスモポリタン性と、施主の新規な建築への指向性と同じくコスモポリタン性である。ここには英国生まれの生粋の英国人建築家は登場しない。施主も大半が同じく、である。しかも論集45号46号でみた施主像と共通で、富裕層ながらラディカルである。建築家の経歴といい施主の交流関係といい、あまりにも重なりあうこれら3例の共通性は事例が加わる次号以降に回すことになる。

現代のロンドンの建築状況に、住宅に限って目を転じれば、テムズ川の南岸にはガラスのハイテク高層マンションが偉容を覗かせる。世界の先端的大都市と変わらないグローバルな景観である。しかし個人住宅では圧倒的に伝統建築が好まれている。その状況は世界的にもかなり特異である。チャールズ皇太子の王立英国建築家協会での発言(1984)などたびたびのモダン建築批判に象徴されるように、モダン建築への批判・不人気には根強いものがある。総括は今後とするも1つの所感がある。「イギリスが統合ヨーロッパの一員となりながら、なおユーロの採用に踏み切れず、『逡巡す

るヨーロッパ人』となっている最大の原因は、『落日』
したはずの帝国の『日の名残』にあるのかもしれない」、
これは歴史家川北稔が書籍『帝国の落日』の書評に記
した文言の一部であるが、大陸が起源で、土地の歴史
や固有性を否定するモダニズム建築に、どこかよそよ
そしい態度を示してきた英国国民の嗜好性にも、大英帝
国への名残と自負が共通しているのかもしれない。そ
こにコスモポリタンたちの活躍できるニッチがあった、
と考えられる。

参考・引用文献

- 1) Jones, Edward, & Woodland, Christopher, *A Guide to the Architecture of London, Third Edition, Seven Dials*, Cassell & Co, 2000
- 2) Ed. Jeannine Fiedler, *Bauhaus* Konemann, Tandem Verlag GmbH, 2006
- 3) Friedewald, Boris, *Bauhaus* (Prestel Verlag, Munchen, 2009)
- 4) Allan, John, *Architecture and the Tradition of Progress*, RIBA publications, 1992
- 5) *Designing Modern Britain*, Archives from Design Museum and British Council, 2006
- 6) Sherwood, Roger, *Housing Prototypes ORG*, 2002
- 7) Dauntton, Martin, *Housing / The Cambridge Social History of Britain 1750-1950: People and the Environment (002)*, Cambridge University Press, 1990
- 8) Powers, Alan, *2 Willow Road*, National Trust Enterprises, 1996
- 9) *The Open University: Goldfinger*
- 10) Reid, Aileen, *Goldfinger- goody or baddy?* The Telegraph: Goldfinger, 2004
- 11) Exard, John, *How Goldfinger nearly became Goldprick*, The Guardian, Friday 3 June 2005
- 12) *TAG Archives: Goldfinger*
- 13) *The Pritchard papers*: Archives of University of East Anglia, 1998
- 14) *Lawn Road Flats: letters & Other Materials*: Archive Hub 2012
- 15) Cohn, Laura, *The Door to a Room A Portrait of Wells Coates* Scholar Press, London, 1999
- 16) Adams, Gene, *The mystery of the Lawn Road novels*: Camden New Journal, 2003
- 17) Pile, John, *A History of Interior Design*, John Wiley & Sons, 2002
- 18) イアン・カフーン 『イギリス集合住宅の 20 世紀』 鈴木雅之著訳 鹿島出版会 2000
- 19) アンドリュウ・ローゼン『現代イギリス社会史 1950-2000』 川北稔訳 岩波書店 2005
- 20) ピーター・クラーク『イギリス現代史 1900-2000』 西沢保他訳 名古屋大学出版会 2004
- 21) 五十嵐太郎 『終わりの建築／始まりの建築—ポストラディカリズムの建築と言説』 INAX 出版 2001
- 22) 杉村憲司 『ハイゲートのフラット：ハイポイント I』 a+u、エーアンドユー、1994 年 4 月号
- 23) 木下壽子 渡辺研司 『30 年代イギリスのモダンハウス』 a+u、エーアンドユー、1997 年 7 月号
- 24) 『20 世紀名作住宅選集』 コリン・デイヴィス 監修：八木幸二、丸善株式会社 2007
- 25) ブレンダン・ギル『ライト 仮面の生涯』 塚口眞佐子訳 学芸出版社 2009
- 26) 塚口眞佐子 『モダンデザインの背景を探る』 近代文藝社 2012

Behind the Evolution of Modern Design: Research into the Circumstances of 1920-30's a Leading Role of Cosmopolitan in Britain

Faculty of Liberal Arts, Department of Interior and Environmental Design
Masako TSUKAGUCHI

Abstract

This paper, 7th issue of the serial work, *Behind the Evolution of Modern Design*, reports the 1930's British social and cultural circumstances surrounding the modern architecture and housing by viewing the 3 cases; HIGHPOINT, 2 WILLOW ROAD and LAWN ROAD FLATS.

At long last around the middle of 1930's the modern houses made a first appearance in Britain, almost one lap behind the continental Europe. Obstructed by the definitely conservative characteristics of the British nationality, which on earth class or personality could play a leading role as a client or a designer of the avant-garde house? Unlike the continental Europe there existed an obvious and significant similarity among them; cosmopolitan.

Furthermore, contrary to continental Europe, apartment houses for the wealthy and highly educated, almost first of all, came out in the suburbs of London, although those were originally conceived as dwellings for low income working class people in continent. In London those tenants also showed an affinity with cosmopolitan or being themselves cosmopolitan. Especially there gathered leftwing or Jewish designers and architects who immigrated from Nazi-Germany since 1934. Consequently all of these cosmopolitan artists made great contribution to the progress of modern architecture and housing in Britain between the World Wars.

Keywords : modern houses in Britain, Highpoint, 2 Willow Road, Lawn Road Flats, immigrant from Nazis-Germany,

